

その12：日本人って何

少し前のTV番組で「遠い日の日本人・微笑の国」という番組がありました。これは幕末から明治初期の日本を旅した、外国人の目で見た日本人像を描いたものです。その一人、イザベラ・バードという中年の英国婦人は、江戸から通訳を一人連れただけで、東北の田舎町を旅しているのです。彼女は、当時の大英帝国に引き比べ、日本人の貧しさと、小さく貧弱な体つきに最初は驚くのですが、次第に当時の日本人の意外な面に気づくのですよ。

見知らぬ国での女の一人旅にもかかわらず、「この国の旅は非常に安全で、誰もが満ち足りたおだやかな表情をしている」などと記しているのです。さらには、「どんなに貧しくとも、暮らしを楽しんでおり、この民族は笑い上戸で、心の底から陽気である」とまで言っているのです。これは私たちが、歴史の教科書や、TVドラマでイメージしていた日本人像と全く異なるものです。その当時の東北の田舎と言え、飢餓、重労働、身売り etc・・・といった貧しく苦しい生活しか思い浮かばないですからね。

もう一人の外国人、大森貝塚の発見で有名なエドワード・モースは、日本人について、さらに褒めちぎっているのです。「日本人の暮らしには見栄をはるところがない。生活道具はほんのわずかだが、洗練されている」さらには「この国は芸術を作り出す人と、それを鑑賞する人であふれているが、アメリカには作る人も鑑賞する人もいない」とまで最大級の褒め言葉をのべているのです。本当に日本は、こんなにも素晴らしい国だったのか？信じられないような話です。もし、これが事実であれば、我々日本人が、あの頃と変わってしまった、と考えるべきなのかもしれません。



明治の開国以来、日本は欧米に追いつくために「富国強兵」を掲げて頑張り、他国に侵略してまで国の繁栄を目指すも、先の大戦の敗北により悲惨な挫折を体験するわけです。戦後は大国「アメリカ」の経済と豊かさを目標に、がんばって彼らに近いレベルにまで到達したわけです。

しかし、戦後 67 年も経て、ふと自分たちの生活と心の中をみると、物質的な部分は十分に充足されているのに、心のどこかに「不安」と「むなしさ」を抱えている一というのが現在の日本人の姿ではないですか。それは食料自給率が 40% に満たないことに象徴されるように、非常に不安定で、危険な基盤のうえにたった繁栄であることに、多くの人が気づいているからでしょうね。

近い将来の日本に確実にやってくるであろう大きな「不安」が「少子高齢化」の問題です。50 年後は日本の人口は 4 千万人減少し、「8 人中 3 人が老人」という人口構成になる、という、きわめて現実的な将来像があります。市場は縮小し、供給力は減退し、日本の GDP は 4 割縮小するということ。日本という国は確実に貧しくなる一現在の日本とは全く違う社会が想像されますね。



これからの時代は生きてゆく上での、価値観の転換をもとめられている時かもしれません。いわば時代の分岐点なのです。とはいえ幕末の日本の人口は約3600万人、今は1億2000万人、そう簡単に社会や生活を変えられるものではありませんよね。「ブータン」のような国をめざすというのも無理がありそうです。よく言うじゃないですかー「人の幸福はポケットの中でなく、心の中にある」と。そして我々は、そのような150年前の日本人の「心のDNA」を引き継いでいる、と信じたいですね。

前述のモースはこうも述べていますよ。「地球上で、日本人ほど自然と生物を愛する国民はいない」さらに「この国のありとあらゆるものは、日ならずして、消え失せてしまうだろう」とも。まさに今の日本と日本人の姿を予言した言葉じゃあないですかね。



「考えてみると、40年まえの学生の頃は、今のように携帯もテレビも冷蔵庫もなかったが、それでつらい思っていたことはなかったよ。何でも持つとる今の若い者の方がかわいそうな気がするよ」

(12・6・13)